

中国における感恩教育の言説分析

－新聞記事の分析を手掛かりに－

日大生産工 劉麗鳳

1. 研究の背景と本報告の目的

本報告の目的は、2000年以降の中国社会において、「感恩教育」がどのように語られてきたかについて検討することである。

2000年代以降、中国社会では「感恩教育」と呼ばれる言説が教育学分野や学校教育分野のみならず、社会的に広く受容されてきた。「感恩」とは、他者・社会・自然から受けた恩恵や利便に対して、それを認識し、感謝の情を抱き、さらにその恩に報いようとする意欲を含む認知的・情意的・行動的側面をもつ概念である(陶、2004)。現代社会を生きる青少年たちには、この感恩の意識が欠如していると指摘され、学校教育をはじめとする様々な領域において、「感恩教育」の必要性が提起された。学校現場では、「感恩教育」をテーマとした実践が様々に行われ、たとえばホームルーム活動、スピーチ大会や外部講師を招いた講演会、教科学習への取り入れ、教室や学校内部の掲示、親や教師に感謝の手紙を送るなどの取組が挙げられる。

学校教育にとどまらず、「感恩教育」に関する言説は中国社会にも一定程度定着しており、とりわけ学齢期の子どもをもつ保護者の中にも、こうした取組を肯定的に捉える者が少なくない(劉、2023)。2000年代以降の中国社会において、「感恩教育」の言説がどのように人々の間で定着していったのか、本報告ではこの点に焦点を当てて検討を行う。

2. 先行研究の検討

感恩教育に関する研究動向を確認するために、CNKIにおいて関連論文の検索を行った。CNKIは、中国最大の学術情報データベースである。このCNKIのデータベースで、論文タイトルに「感恩教育」を含む論文を検索したところ、1641件がヒットした。1641件の分布を表1にまとめた。表1のとおり、「感恩教育」に関する先行研究は、2004年以降に増加しはじめ、2010年の168件のピークを迎えたのち、減少傾向にある。

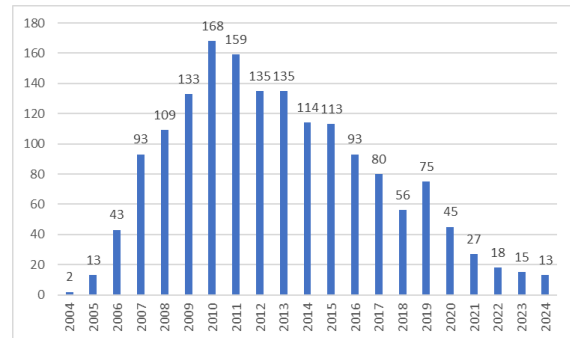


図1 「感恩教育」をタイトルに含む論文数

次に、「感恩教育」に関する先行研究の概観を示しておく。先行研究では、現代中国における感恩意識が希薄化する要因として、以下の5つを挙げている。すなわち、1) 市場経済がもたらす消極的影響：市場経済の等価交換原則が従来の伝統的価値観に衝撃を与え、青少年の思想や道徳領域に消極的影響を与える。2) 学校教育の問題：知育を重視し、徳育は軽視する学校教育。3) 家庭教育の問題：長年にわたる受験教育の影響により、保護者は子どもの知的発達や学業成績のみを重視するような子育て観を持つ傾向があること。4) 感恩文化の断絶：改革開放政策と市場経済の発展により、伝統的な道徳的価値観（たとえば、孝文化¹⁾など）が断絶されていること、5) インターネットの消極的影響：青少年たちがインターネットに没頭し、現実の集団活動や人間関係が希薄化していること(陳・劉、2006)、である。

こうした指摘を背景に、2000年代前半以降、感恩教育は学校教育の中で活発に導入されるようになり、その教育的効果を検証する研究も散見されるようになった。たとえば、葉ほか(2013)は、感恩教育が直接的または間接的に子どもたちの学業達成と正の相関をもつことを指摘している。

一方で、数少ないものの、「感恩教育」の問題点を指摘する研究も見られるようになった。たとえば、李・熊(2024)は教育社会学の視点から「感恩教育」を批判的に捉え直し、農民工子弟が多く通う都市部の学校を対象としたフィールド調査を通して、次のような点を明らか

Discourse Analysis of Gratitude Education in China:
An Analysis Based on Newspaper Articles

Lifeng LIU

にした。すなわち、「生徒が貴重な教育機会を与えてくれた学校に感謝する」という趣旨のもとで感恩教育を実施している学校では、学校側は都市部が農民工子弟に教育機会を提供することを「恩恵の施与」とし、農民工子弟を「感恩すべき立場」と位置づけている。一方で、学校は農民工子弟を受け入れることで社会的資源を獲得し、都市部の教育システムにおける自身の弱い立場を改善していることを指摘した。

このように、「感恩教育」に関する研究は蓄積されてきている。しかし、冒頭で述べたように、「感恩教育」は教育学や学校教育の領域にとどまらず、社会的にも広く受容されてきた側面があるが、その受容プロセスは必ずしも明確にされてきたとは言い難い。そこで本研究では、上海市で発行されている新聞記事の分析を手掛かりに、この点について検討する。上海市の教育水準は中国国内でもトップレベルにあり、2012年および2015年のPISA調査では読解力・数学・科学の三分野すべてでトップの成績を収めるなど、教育の質の高さで知られている。また、2005年に公表された上海市新版「中学生守則」（中学生の行動規範）においても、全国に先駆けて「感恩を学ぶ」という内容が加えられた。したがって、上海市の事例は中国社会における「感恩教育」の受容プロセスを考察する上で、一定の代表性を有していると考えられる。

3. 研究の方法・対象及び現時点の分析

図2は、2003年から2024年までに上海市で発行された新聞記事のうち、記事タイトルに「感恩」または「感恩教育」など²⁾の語を含む記事件数を示したものであり、計134件であった。本報告では、暫定的にこれらの記事を萌芽期（2003～2004）、関心拡大期（2005～2011）、関心衰退期（2012～）の三期に区分し、それぞれの時期における記事内容の特徴を、テキスト分析の手法を用いて検討する。

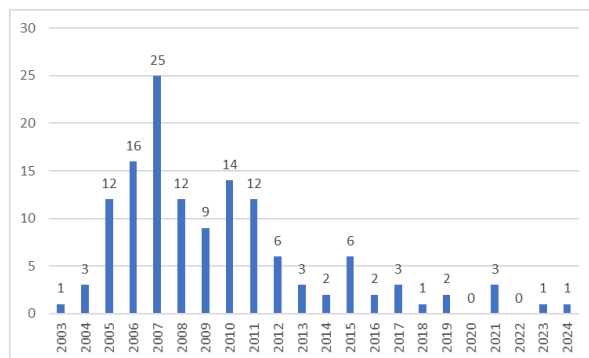


図2 「感恩教育」または「感恩」等を冠する記事件数

現時点の分析結果は以下の通りである。萌芽期（2003～2004）には、「感恩教育」の対象として主に父母が想定され、「感恩意識」を育むことの必要性が論じられた。たとえば、解放日報が2003年9月12日付の記事「『感恩教育』の強化は喫緊の課題」において、はじめて記事タイトルに「感恩教育」を冠した。同記事では、新年度を迎える大学新入生に見られる過度な消費傾向を批判し、学生の自己抑制力と金銭感覚を養い、親への感恩意識を涵養することが喫緊の課題であると述べている。次に、関心拡大期（2005～2011）では、「感恩教育」をテーマとする取組が学校教育に定着した時期であり、この時期には「感恩教育」の対象が父母から教師、学校さらに社会へと拡張された。一方で、学校教育における過度な「感恩教育」を批判する記事も多く見られるようになった。この傾向は教育学研究の分野ではあまり見られない特徴である。たとえば、新民晩報は2010年6月7日付の記事「跪いて感謝するのは真の感謝か、それとも『パフォーマンス』か」において、高校の卒業式で学生が教師に跪いて感謝するというイベントを、「学生の感情を軽視したパフォーマンス」とであると批判している。

〈註〉

- 1) 「孝文化」とは、目上の人を敬う文化の在り方を指す。
- 2) 「下跪」（日本語：跪く）または「磕頭」（日本語：土下座する）など、感恩教育をテーマとした教育実践にしばしば見られる内容も検索キーワードに含めた。

〈参考文献〉

- 1) 陳昌興・劉利才、2006、「当代社会感恩意識缺失の根源、危害及其对策思考」『青海社会科学』No. 6、pp. 15-18.
- 2) 陶志琼、2004、「關於感恩教育的几个問題的探討」『教育科学』Vol. 20、No. 4、p. 9-12.
- 3) 李森・熊易寒、2024、「成為受惠者：学校感恩教育話語建構与農民工随遷子女的感恩體驗」『江西師範大學學報(哲学社会科学版)』Vol. 57、No. 5、pp. 125-133.
- 4) 劉麗鳳、2023、「母親たちのしつけと教育戦略—中国農村部の事例に基づいた検討」『研究紀要』No. 105、pp. 17-33.
- 2) 葉宝娟・楊強・胡竹菁、2013、「感恩對青少年學業成就的影響：有調節的中介效應」『心理發展与教育』No. 2、pp. 192-199.